

# われわれの教育活動

2008年度総括と2009年度方針

30

2009年4月

一橋大学スポーツ科学研究室

# われわれの教育活動

2008年度総括と2009年度方針

30

## 目次

はじめに .....	3
・われわれの教育活動をめぐる状況 .....	4
1. 大学をめぐる政策動向 .....	4
2. 本学の動向と運動文化科 .....	5
・2008年度の教育活動の成果と課題 .....	7
1. カリキュラム編成と体制 .....	7
2. 2008年度の教育活動の成果と課題 .....	8
(1) スポーツ方法 .....	8
(2) スポーツ方法 .....	13
(3) スポーツ科学・健康科学 .....	16
(4) 教養ゼミ .....	17
(5) 学部講義・ゼミ .....	18
(6) 大学院講義・ゼミ .....	19
3. 教育条件の整備・拡充 .....	20
・教育部活動 .....	23
1. 実践交流会 .....	23
2. 教育活動日誌 .....	23
3. 調査活動 .....	24
4. 教育部の活動・体制 .....	26
・2009年度教育活動の方針 .....	27
1. 2008年度の達成と課題 .....	27
2. 2009年度の基本方針 .....	27

3 . 教育活動 .....	27
( 1 ) 2 0 0 9 年度のカリキュラム編成と体制 .....	27
( 2 ) カリキュラム、および教育内容・方法の充実 .....	29
4 . 教育条件の整備・拡充 .....	29
5 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整 .....	29
6 . カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究 .....	29
7 . 教育部の活動 .....	30
( 1 ) 諸行事の開催 .....	30
( 2 ) 調査活動 .....	30
( 3 ) 資料・調査報告書・研究成果等の発行 .....	30
( 4 ) 2 0 0 9 年度教育部関係日程（案） .....	30

## 年間計画

### 資料 1 . 2 0 0 8 年度時間割

- 2 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査用紙
- 3 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査結果
- 4 . 実践報告：ソフトボールの授業（内海和雄）
- 5 . 実践報告：サッカーの授業（高津勝）

## はじめに

この冊子が作成され始めてから今年で30年、通巻30号となった。今年3月定年退職される内海、高津両教授は、30年以上の在職で、この30号全てに関わってこられた。私は、初期の3号から関わったので、30号全てについての当事者とは言えない。この冊子の30号を総括することは、この4月に両教授の後に迎える坂上教授、中澤講師とともに残ったスタッフがなすべきことであろう。そのさい残り1年の私とその責務を負うことも十分自覚しての話である。

2008年度の運動文化科の課題は、1.後任人事と体制の整備、2.カリキュラム改革案の確定、3.施設要求の実現、であった。その達成については、1.2人の後任採用、1人の未採用、1人の不補充という結果に。だが、非常勤講師の削減はなく体制は維持できた。2.語学教育を中心とする全学共通教育改革が不首尾になるなか、運動文化カリキュラムの講義改革案を検討、確定したが、実施案は次年度に。3.この課題がこの1年で重大な選択に直面したことについては本冊子の関係箇所に譲る。前進的契機か、後退か、2009年度の取り組みで、この課題での評価が下されることになる。年度途中で課題となったこととして、スポーツ方法履修での長期欠席・見学者の状況把握に取り組んだことも付け加えなければならない。

上記の3.で法人化の仕組み、その運営の問題をいやというほど味わった。すでに5年目を迎える法人だが、運営費交付金は削減され続け、1期目の中期目標・計画の反省もないまま、2期目の策定が進んでいる。そのさいキーワードとなるのが、トップダウンで定められる「戦略」であり、これに対抗する意思形成が分断される仕組みになっているのである。それでも、大学が教育機関である限り、その現場に当る人間の意見を反映する運営がなくなることはない。したがって、そこに矛盾が生じるのは当然で、運営を民主的にすべきとの学内世論が高まれば、当局もそれに押されていくが、そうでなければ仕組みの持つトップダウンの形がストレートに作用することになる。現状は、その中間のようで、どちらに行くかはこれからにかかっていると、私は思っている。

本冊子では私たちの教育活動をまとめ、今後の課題を確認しているが、この冊子に収められない運営の問題なども教育活動の構造と主体に関わるものとして、私たちは議論し、判断してきたことを明らかにしておきたい。これは、30号の冊子を総括するさいにも不可欠な視点とすべきであろう。

年々多忙化する年度末の本冊子作りにスタッフ全員が携わり、担当助手の編集実務・印刷によって出来上がったことに感謝したい。

2009年3月 上野卓郎

## ．われわれの教育活動をめぐる状況

### 1．大学をめぐる政策動向

戦後最大ともいわれる経済危機がおとずれている。2008年の10-12月期のGDP年率は12.7%減になり大幅に減少した。そのような中で、「派遣切り」や高卒・大卒予定者の内定取り消しが後を絶たない。厚生労働省の3月13日付発表によれば、今年度の大学生の就職内定率は86.3%で、前年同期を2.4ポイント下回っている（ホームページより）。他方で、内定取り消しという事態は、大学生1280人、高校生294人に上っている（2009年2月19日現在）。現役の大学生には、学費が納入できないなどの問題として、影響が見え始めている。そのような事態にたいし、例えば、東京大学では授業料全額免除制度を大幅に拡張したが、その申請数は昨年度の2倍になったという。また、2009年度には62の私立大学で入学金や授業料の減免など、緊急の支援対策が実施される。急激な経済不況が大学生活へも影を落としており、高額な学費の家計への負担が、さまざまな調査で明らかにされてきている。

日本の高等教育の国民の負担については、OECDにより世界一高いことは指摘されてきた。麻生内閣の教育再生懇談会における第三次報告においても、「大学教育の危機」や「高等教育への公的支援のあり方の改革」が指摘された。その一方で、国立大学運営費交付金や私立大学一般補助などの基盤的経費は引き続き削減され、競争的資金の配分もその評価によって行われている。そのことが、大学間格差をいっそう拡大していることは明らかだが、国立大学学長宛に行われたアンケートにおいては（朝日新聞2008年11月14日）9割が法人化後「大学間格差」が広がったと回答している。そのうち37の大学においては「資金が足りなくなり、教育研究や学生サービスに悪影響が出た」と回答しており、また定年・退職教職員の補充が十分になされないために教育への影響も懸念されている。

このような大学間の格差が、より広い意味での学生生活に影響を及ぼしてはいないだろうか。たとえば、昨年は大学生による麻薬の所持、売買等で逮捕される事件に注目が集まった。検挙数では統計を取り始めた1957年以降、最多(2778人)となったが、そのうち大学生は3人減の89人と横ばいであった（朝日新聞2009年2月20日）。だが、いわゆる有名大学の学生の検挙が大きく報道され、学生の側のモラルや倫理観といった問題が問われることとなった。さらに、このことは、大学側の学生生活全般への支援体制が不十分であったことを示してはいないだろうか。図書館など学内施設や学生寮で大麻の使用・栽培が行われていたという事態は衝撃的であり、それら施設を使用する学生のモラルの欠如だけではなく、大学側の認識の甘さも露呈してしまったといえる。時代の変化とともに学生の性質や生活様式も変化しており、細かな配慮や対応が必要とされる。十分な人的・資金的基盤があってこそ十全な対処もまた可能となるのである。このような状況に、国立大学法人はどのように対応していくことができるだろうか。

国立大学法人は、本年が5年目となった。現在、次期中期計画が策定されている。総花的、具体性にかける、などと指摘された第一期中期計画中期目標であったが、2010年からはじまる第二期では、目標のいっそうの明確化や、全体の項目数の縮小、簡略化が指導されている。その一方で、文部科学省、国立大学協会による第一期についての総括はいまだなされていない。たとえば、機械的に減少していく運営費交付金のあり方は、上述の教育再生会議が指摘する高等教育の公的支援の報告とは矛盾するものである。現在の経済的危機において、これまでの構

造改革路線や規制緩和のもたらした問題についても議論されつつある。法人化が大学教育に与えた成果・問題点についても責任ある所轄による総合的な分析がなされるべきであろう。

(国立大学法人評価委員会は、国立大学法人と大学共同利用機関法人計 90 法人の中期目標達成状況の評価と、各学部や大学院の研究科などの評価結果を公表した。2009 年 3 月 26 日)

体育・スポーツをめぐる動向はどうであったか。

2016 年東京オリンピック誘致が国会で決議され、正式な国からの支援体制が約束された。昨年の北京オリンピック・パラリンピックをみても、スポーツ大会はメガイベント化し、世論に与える影響がますます大きくなっていることは疑いの余地はない。近年の大学におけるスポーツ学科や学部等の新設も、スポーツが様々な領域と結びつき幅広く普及していることを示しているといえるだろう。だが、招致計画を見る限り、オリンピックの招致が日常的なスポーツ機会を拡充するとはいいがたい。招致活動だけで、すでに当初見込み(約 55 億円)の 3 倍にせまる 150 億円となり、そのうち 100 億円は東京都の負担となっている(平成 18 年 9 月 - 平成 21 年 10 月分。招致委員会ホームページより)。開催した場合の経済効果ばかりが強調されるが、その反面、資本や税金の投入が、オリンピック後の人々の生活環境やスポーツ環境に具体的にはどのようなメリット/デメリットをもたらすのか、過去の開催から十分に検証されているとは言い難い。スポーツが様々な領域において注目されている時代であるからこそ、経済効果といった一元的な側面だけでなく、多角的に議論されるべきであろう。

また学校体育においては、学習指導要領が改定され、体育では武道が必修化された。学生・生徒らが多様なスポーツ・身体文化を享受できる環境は重要であり、その機会の拡充と考えればその意味では評価できる。他方で、武道に特化した設備等の予算の偏りや、愛国主義的教育へと直結するような指導のあり方や動向には注視していく必要があるだろう。

## 2. 大学の動向と運動文化科

本年度は、法人化後初の学長選挙が行われた。法人化後、学長選考会議による学長選考規則が定められたが、平成 19 年 12 月 18 日付けで「国立大学法人一橋大学学長選考規則」に改正された。本学においては、学内規則により従来どおり「学長選考意向投票」を行うことが定められている。意向投票は教員、助手および主査以上の事務職員によって行われる。その結果、杉山学長が再選(任期 2 年)された(副学長は、社会連携・財務担当に山内進理事、学生担当に盛誠吾理事、研究、国際交流、評価担当に田近栄治理事)。今回は、一般職員の自主的な投票として参考投票も行われたが、次回以降も教員、職員、学生による「三者構成自治」の理念の観点からも、制度が改悪されないように働きかける必要がある。

杉山学長による二期目に入ったが、第一期中期目標に盛り込まれていた新共通教育カリキュラムの導入については、全学的な合意を得るのが困難な結果となった。そのため、改革の動き自体が止まってしまう危機にも直面したが、全学教育ワーキンググループ(WG)が教授会におけるサウンディングを行い、最終的な方向性を定めることとなった。この点においては中期計画を一部修正し、2009 年度計画において次のようにまとめられた。「全学教育 WG の報告を受け、全学組織である教育委員会において 2010 年度からの新たなる英語教育の導入に向け、その実施方法等について検討する」。さらに、「全学教育 WG の報告を受け、全学組織である教

育委員会において、教養教育及び専門教育のあり方について検討し、H22年度からの新カリキュラムの一部の実施を目指す」とあり、英語を中心とした語学教育の改革に着手することがおおむねの方向となった。それとともに、商学部における独自の英語教育案が1月教授会に示された。これは、現在の英語および初修外国語を選択制にすること、独自の外国人教員による英語授業の開講などから構成される。しかし、この案については、クラス担任制にも影響が出ることから全学的な合意はまだ得られていない。現在、すでにスポーツ方法 などでは、学部必修による時間割の関係で、学部構成に偏りも生じている。学部を超えた多様な学生による多様な人間関係の構築が目指されているスポーツ方法 においても、それが困難になりつつある。GPA制度の導入に向けて、本年度から履修撤回制度が始まり、成績説明請求制度も本格的に運用された。それらが教育の質を保証する限りは評価できるが、学生の単位取得をいたずらに厳格化し、自由な履修行動を制限することはあってはならない。高等教育における専門教育の充実は当然であり、さらに多様な学びや人間関係の形成を可能となるような共通教育・リベラルアーツのあり方については多くの大学で様々な試みがなされてきているのが、近年の動向でもある(例えば東北大学、新潟大学、早稲田大学等)。本学においても、より具体的な施策が求められる段階に入ってきている。

教育を巡る観点からは、教授会で提起された教員の「再雇用制度」の前倒し実施(案)は様々な問題を含むものとなった。本格運用は2年後であるが、前倒し実施については、提案がすでに来年度のレプランが確定した後であったこと、再雇用の条件に新たな人事の凍結が盛り込まれたことなどが、カリキュラムの点からは問題となったといえる。雇用の条件等についても、本格実施に向けても議論含みとなった。これらについても十分に注視することが必要である。

他方、施設をめぐる新たな問題が提起された。第3研究館(仮称)の建設予定地に、インフォーマルながら「新体育館予定地」が、あげられたことがわかった。室長が、財務担当副学長、および社会学研究科長にこれまでの経緯を説明した。場所については現在のところ正式な発表はなされていないが、中期計画には「第3研究館(仮称)」の建設が明記されており、引き続き情報収集にあたる必要がある。(3月教授会には報告されていないが、「第10回教育研究評議会議事予定 . 審議事項23. 東キャンパスにおける体育施設エリアについて」において、第3研究館(仮称)の位置と面積が特定されている。)

他方で、教育活動にかかわる施設整備や用地変更が財政的観点からトップダウン的に決定されることには警戒していく必要があり、従来の学生担当副学長との情報連絡会だけではなく、財務担当副学長とも接触を図り、より長期的な視点でのキャンパス整備計画について議論することは必須である。また、学生委員会において課外活動の施設使用についてのWGも立ち上がり、それらとも連携していくことが重要であろう。

2008年4月に一橋寮で起こった1名の新入生の飲酒による死亡事故は、一橋大学の歴史においてももっとも悲劇的な事故となった。1名の退学者、4名の停学者、11名の訓告が言い渡され、杉山学長は2ヶ月給与3割自主返納、坂内徳明学生担当副学長が辞任する事態となった。寮における飲酒習慣と、事故が起きた後に明らかにされたその実態は衝撃的なものであった。寮における飲酒を促進させた理由にはさまざまな要因があるだろうが、その一つには、「peer pressure(仲間関係における圧力)」があるといってよいだろう。親元や地元を離れた新入生たちにとって、新たな生活の場における寮で「うまくやっていく」ことは、大学生活をはじめ

にあたって最も重要なことであるはずだ。しかし、そのような「仲間作り」において、未成年も含めて飲酒に頼ってしまったり、強制的な関係が作られたりする状況があってはならない。多様な人格をお互いが認め合い、自由で自立的な関係性の上にこそ、豊かな人間関係が築けるといえるだろう。大学とは、そのような人間関係を学ぶ場でもあるはずだ。この件に関して、学生委員会は、調査委員会等も含めれば4月以降50回を超える開催となった。また、学生への処分言い渡しが事故発生から半年もかかったことは、事態の重大さを鑑みても、時間がかかりすぎたといわざるを得ない。自治寮とはいえ、大学側の管理体制について厳しく問われる問題である。この点についても、法人化後、国立大学の社会的責任はいつそう厳しくその評価が問われている。事故の再発防止と、処分学生へのケアについてもいつそう留意していくことが求められる。亡くなった学生の冥福を祈りたい。

本年度の実技授業は、作業員の坂口さんの尽力により、すばらしい状態で行うことができた。ここに感謝の意を表したい。来年度も継続していただけることとなり、授業の充実に支援いただけることは大変有り難いことである。

内海、高津両教授が退職され、4月から2名が着任する。様々な課題はあるが、新たな体制のもとで、意欲的に取り組んでいきたい。

## ・2008年度の教育活動の成果と課題

### 1. カリキュラム編成と体制

#### <体制>

- ・ 専任は、早川後任未採用、藤田後任1年不補充のため、6人の体制となった。
- ・ 高津、内海の一部サバティカル実施+定年前負担軽減は、非常勤講師を充てた。
- ・ 専任担当総コマ数は17コマ。
- ・ 専任不補充およびサバティカル等を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は25で、昨年度より5.5増となった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は59.5% (2007年度46.4%)。
- ・ 2007年度の非常勤講師の継続とともに本年度2人の非常勤講師(森、菊池)を依頼し、渡辺氏にスポーツ方法 0.5コマ増をお願いした。

#### <開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して42コマである。

	2008年度		2007年度	
全学共通教育開講コマ	42	通年コマ	42	通年コマ
・方法 (療育コース)	28	通年コマ	28	(1)通年コマ
・方法	19	半年コマ	19	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ



< スポーツ方法：種目別開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2008年度	2007年度	2008年度	2007年度
テニス	7	10	6	5
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	3	3
サッカー	4	3	1	2
バレーボール	2	1	-	-
ソフトボール	3	2	0	1
野球	-	-	0	1
ジャズダンス	2	2	-	-
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	1
ジョギング&フィットネス	-	-	1	-
卓球	-	-	1	1
	<b>28</b>	<b>28</b>	<b>19</b>	<b>19</b>

2. 2008年度の教育活動の成果と課題

(1) スポーツ方法

**2008年度のスポーツ方法の全体的特徴**

毎年度末に実施している「スポーツ方法に関する調査」の結果によると、2008年度のスポーツ方法全体の「満足度」(「大変満足」と「まあ満足」と答えた者を合計した割合)は2007年度に比べて4.4%も向上している(78.8%[2007年度] 83.2%[2008年度]:巻末資料3-1「スポーツ方法に関するアンケート」参照)。例年、スポーツ方法の満足度は高いのであるが、今年度は99年度から開始した本調査の中でもっとも高い満足度を獲得したこととなった。特に、「大変満足」と答えた者が35.9%(歴代1位)と非常に高い値を示していることは大変喜ばしいことである。さらには、「やや不満」「大変不満」と答えている受講生は合わせて3.7%(2007年度:4.4%)と、昨年度から僅かではあるが減少している。これらを総合すると、今年度もスポーツ方法の授業では、全体的に学生を満足させるに十分な質の高い授業が展開されてきたと考えられる。われわれは、高い「満足度」(低い「不満度」)に自信をもつと同時に、今後もこのような状態が継続できるよう、受講生の学習がより促進されるようなスポーツ方法の授業をつくっていかねばならないであろう。

さて、スポーツ方法の目的は「( )基礎的な体力の養成」と「( )スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成」、「( )グループを通しての人間関係の形成」である。2005年度から「スポーツ方法に関するアンケート」の中にこれら

のスポーツ方法 の目的が達成されたかどうかを問う質問項目を設けている。

そのアンケートの結果によると、スポーツ方法 の授業が「体力の維持・向上」に役だったと答えている者は 65%（「大変そう思う」13.9% + 「そう思う」51.1%）にものぼる（巻末資料 3 - 1 参照）。この数値からは、スポーツ方法 の授業が彼ら・彼女らの運動欲求を充足させるための貴重な時間になっているということが読み取れ、週に一度の授業であっても、「基礎的な体力」を養成するための刺激や契機になっているとすることができる。さらに、「うまく」なりたがっている受講生に対してどれだけ応えられているのかについて、「技術・方法の認識の深まり」「技術・技能の向上」に着目すると、それぞれ 77.7%、64.6%の者が肯定している。つまり、多くの者が自らの認識の深まりや技術・技能の成長を実感できているといえるであろう。ただし、1 年をかけて「技術・技能の向上」が実感できない者が 3 割ほどいるという事態はやや問題であるとも考えられる。われわれはこれらの受講生の数を少しでも減少させるべく、授業を工夫していかなければならないであろう。

次に、「人間関係の形成」に関して、「仲間ができたか」という質問に対する回答をみると、85%の者が「大変そう思う」「そう思う」と回答している。後述の通り、ほとんどのスポーツ方法 の授業においてグループでの学習が行われているが、85%もの受講生が仲間づくりに成功しているということは、集団での学習が成功しているとみることができるであろう。

そして、総合的にとらえて「スポーツを（受講したスポーツ種目を）楽しむことができるようになったか」という問いに対して、85.5%の者が「大変そう思う」「そう思う」と答えている。われわれは、主体的に自己の能力を伸ばし、仲間と教え合い・学び合いができるスポーツの実践者を育成しようとしている。このアンケート結果からは、それらの目標をある程度は達成できていると評価できるのではないだろうか。もちろん、これからもたゆまず努力をしていかなければならないのだが。

以下に、年度末に提出された授業担当教員からのアンケートをもとに、それぞれの授業での工夫・努力についてみていきたい。

## 授業の内容と方法

### <グループ学習に関する工夫とその成果>

スポーツ方法 のほとんどの授業においてはグループで自主的に練習メニューをつくって学習をすすめていくという方法がとられている（個人種目とチーム種目にかかわらず）。これは、スポーツの学習において、それぞれの学習集団の課題に応じた方法によって学習が促進されるからである。それぞれの授業には、過去の運動・スポーツ経験もさまざま、身体を動かすこと・スポーツに対する好き嫌いの度合いもさまざま、体格・体力もさまざまといった多様な者が集まる。教授法の一つとして、このような集団を、例えば運動技能のレベル別グループに分けて指導・学習を進めるという方法もあるが、スポーツ方法 の授業担当者は、男女差や競技経験のレベルに配慮し、異質な者同士の組み合わせによるグループを作ることによって学習効果を上げようとしている。ただし、グループごとの技能レベルや体力のレベルは均等に振り分ける工夫をしている。このように「異質な者同士」の「競技レベルの均等」なグループをつくることを工夫するのは、一つにはグループ間の競争的刺激が学習を促進するた

めであり、最初の段階から技術や知識に差がある場合にはそれが阻害されるからである。またもう一つの重要なポイントは、異質な者同士（教員によってはグループ内の学部の割合についても配慮している）を一つのグループにすることにより、グループ内において構成員同士の「教え合い・学び合い」が促進されるというところにある。スポーツ方法の授業ではスポーツを通して「仲間をつくること」や「集団を運営していく能力」などの獲得を目指しているが、グループ学習はそれを達成することにも効果のある学習形態であると考えられるのである。

実際の授業担当者の工夫について以下にみていこう。

菊地は、「授業1～4回目までは、学生の技術力・雰囲気等を把握および最低限の基本技術を習得させるために、全体で一斉授業の形式をとった「後、野球・ソフトボール経験者と未経験者が各チーム均等になるようチーム分けを行い（1限め：3チーム、2限め：4チームを編成）、技術の習得、ゲーム前練習、ゲーム、ゲーム中の諸記録、チームノート記載、用具の準備・片付け等すべてチーム単位での活動」とし、授業を展開している（菊地・ソフトボール）。

大半のスポーツ方法の授業では、このように「経験者」と「未経験者」をうまく組み合わせさせてそれぞれのグループが均質になるように工夫をするのだが、このような方法を採用することの意義について受講生が十分に理解をしないと経験者の側から「自分は教えてばかりいる」「レベルが高い者同士でゲームがしたい」などの不満が出されることになり、グループ全体の学習が阻害されることにもなる。その点、鬼丸のテニスでは次のような工夫を行い、そのようなリスクを回避している。

「1・2限の授業は概要通り実施できた。本年度のグループ運営はほぼ順調にいき、年度末にグループ活動への不満を訴える声は殆どなかった。ここ数年、授業開始1・2回目に特に注意してグループ活動の意義や、やり方を各グループに説明している。最初の時期にグループ運営のイメージが共有されるとあとはスムーズにいくようである」（鬼丸・テニス）。

鬼丸のように、授業開始時期にグループでの学習の意義について十分に説明することによって、経験者は学習集団における自己の位置づけを明確に出来、また、未経験者は、どうしても経験者が中心となる年度当初のやり方をスムーズに受け入れることになるのであろう。年度の前半には、経験者が学習をリードしていくということが望まれ、このことにプレッシャーを感じる者も少なくない。坂はバドミントンの授業で、数名の経験者が協力してリーダーシップをはかれるように、4つのグループを前半の授業では2グループずつ統合した「より大きなグループ」で活動させるという工夫を行っている。経験者が少ない場合には、このような形態で授業を展開するののも一つの方法であろう。

授業における経験者と未経験者の関係がうまく構築できた場合には、尾崎のテニスの授業にみるような経験者からの感想も提出されるのである。

「実際の授業場面では教員からのアドバイスも適宜行っているが、グループの中での経験者の位置づけ（「技術アドバイザー」）は重要である。経験者の位置づけは、オリエンテーションの時から説明を続けたが、経験者からは、高校までの「教わる立場」から「教える立場」への転換にとまどいながらも、「教えていくことで、自分がやってきた技術でこれまで曖昧だった部分がはっきりした」「サークルで初心者や新入生に教える上での参考になった」との意見が多かった（尾崎・テニス）。

経験者がリーダーシップを発揮して未経験者がそれについていくという授業は、一方で、受動的な「お客さん」の受講生をつくってしまうことにもなる。また、こうした傾向は、経験者が常に重要なポジションや役割（例えばソフトボールのピッチャーやキャッチャー）を担い、未経験者は周辺ポジションに甘んじるといった構造をつくりがちである。主体的に授業に関わり、誰もが授業の中心になることを目指すスポーツ方法の授業では、多くの担当者がグループノートを活用し、たとえ未経験者であっても授業をリードしていく機会を設けるなどの工夫をしている。そのような点から、内海のソフトボールの授業での「打順と守備の平等なローテーション」は、「お客さん」をつくらないための工夫として他の授業にも応用が利くのではないだろうか（巻末資料の実践報告参照）。

グループづくりの成否は授業全体の成否を決定づける大きな要因となる。しかしながら、これはグループに集まる受講生の技術レベルや性格に左右されることが多く、こうすれば必ず成功するという方法がなかなか見つからないのも事実である。実践交流会などで各教員の経験を共有する機会をもつ必要があるであろう。

### <学生の主体的学習に対するサポート>

グループでの学習は、それぞれのグループ（チーム）の課題に即した練習を自分たちで試行錯誤しながら進められる。このような授業では以下の尾崎の指摘のようなジレンマを教師は抱えることになる。

「自主的な練習計画の策定は、教師から一方的に与えられるプログラムと違って、自分たちが考えて自由にできる点でよかったと同時に、技術を理解する上でも有益であったとの評価が目立った。最後の点に関しては、『もう少し先生から教えてもらいたかった』『初心者には練習メニューの提示をもう少し多くして欲しかった』という趣旨の、教師側からの『指導』の機会・量をもう少し増やすことへの希望も出されている。実際には、授業中などに個別に声かけをしたりしながら適宜アドバイスをしたり、練習方法の紹介を口頭で行ってきたりしているが、すべての学生に行き渡っていないことも事実である。学生の『自主性・自発性、自律的計画づくり』と『教師の関わり方』のコラボレーションの『落とし所』がどの辺にあるのか。現状としては『及第点ではあるが、まだまだ改善の余地がある』というところか（尾崎・2006年度テニス）。

教員の側から「ああしなさい、こうしなさい」という指示を出すばかりでは、学生の主体性が奪われ、技術や練習方法への認識の深まりは期待できない。しかしながら、あまりにも学生の主体性に任せきっても同様に認識の深まりは阻害される。これらのバランスをどのようにとるのか、そこが難しい点なのである。

そのような点で、高津のサッカーの授業におけるホームページを活用した授業づくりは、非常に巧みに受講生の主体性を引き出すことに成功している。この授業では「学生の自主性・主体性を信頼し、彼らに年間の授業の展開について意見を出させ、それを基本にして授業づくり」が行われた。具体的には、一人の学生から提出された授業展開に対する意見を助手の協力によりホームページ上に掲載し、他の受講生からも意見を募り、それを実際の授業に反映させていったのである。また、各授業時の「グループノート記載事項の要点、見学者のゲーム批評、教師によるゲーム分析と批評など」もホームページに掲載し、学生との交流を図っている。その

ことにより、「自分たちの意見表明によって授業の仕方が変わる、という経験をするることによって、例年以上の学生の積極的な授業参加とその意欲を引き出した」と高津は総括している。学生が主体的に授業に関わり、積極的に授業を自分たちでつくっていきこうとしている様子はホームページ上の高津と学生のやりとりを見れば明確に伝わってくる。また、種目や受講生のスポーツ経験によっても異なるが、学生とともに作り上げていくスポーツ方法の授業とはどのようなものであるのか、学生の自主性・主体性をどのように引き出せばよいのかということもそこからは読み取れるのである。ITを活用したスポーツの授業の実践としても非常に参考となるが、それだけではなく、われわれは学生の主体性を引き出すためのコミュニケーションとはどのようなものであるのかをここから学ぶべきであろう。

### <TAによるアシスト>

2008年度のスポーツ方法では、高津のサッカー、岡本のスポーツフィットネスの授業でティーチング・アシスタント（TA）が採用された。

高津の授業では、「雨天時の教室でのAV再生、戸外でのゲームのビデオ撮り（3回）、遅刻して来る者の出欠記入、試合のときのレフリー、グループワークや技術指導の際の学生への指示やコミュニケーションのための補助」などをTAが行っている。高津はそのような業務をTAにまかせることについて、「TA自身の教育経験・指導経験の蓄積と力量の向上にとって重要な機会になる」ということを指摘している。

岡本のスポーツフィットネスの授業では、毎回授業の冒頭に体重や体脂肪率、血圧などの測定を行うが、TAが採用されたことにより、これらの機材の準備、片づけがスムーズに行われ、担当教員が授業に集中できる状況が作り出されている。また、冬学期に健康法・トレーニング法のグループワークを実施させるが、TAがディスカッションに加わることによって、受講生の学習が促進された。

質の高い授業づくり、授業に関わる大学院生への教育効果と、よい面ばかりのTA制度なので、今後は他の授業においてもTAを採用し、授業の充実が図られるべきであろう。

### <長期欠席者・長期見学者への対応>

今年度は、長期欠席者や長期見学者への対応についても、年度末に各授業担当者に質問した。近年、スポーツ方法の授業においてそのような学生が目立つ傾向にあり、その取り扱いについて検討する必要があるが出てきたこと、また、1・2年生で問題を抱えた学生に対して、精神的な面も含めたケアの必要性が学内で高まっていることなどがその背景にはある。

長期見学者に対しては、授業への積極的な関わりがある場合、別途、課題を提出させるなどして対応しているケースが多い。現段階では、それぞれの授業において担当者が個別に対応するに留まっているが、今後は各ケースについて早期に事情を把握し、運動文化科として対応していく体制をつくる必要があると考える。

長期欠席者への対応は、現在、欠席理由などについてフォローし、関連部署（学生相談室、留学生課、保健センターなど）と連携してケアするということは行っていないが、クラス顧問制度も形骸化している現在、今後はわれわれでどのように対応するべきか検討しなければならないであろう。

次年度の長期見学者、長期欠席者への対応は、まずは、教育部を中心に、各学期の途中で授業担当者への聞き取りを行い、それぞれのケースの事情を把握したうえで対応を考えていきたい。ケースによっては、学生相談室や留学生課、保健センターなどとも連携して対応することも考える。

### < 盗難の頻発と防止策 >

今年度は例年になく、授業時間内の盗難が相次いだ。毎年、学生が棚等に放置した金品が更衣室から盗まれるというケースが数件認められるが、今年度は、グラウンドの側に止めた自転車のカゴから、授業実施時間にも関わらず貴重品が盗まれるという悪質なケースも複数発生した。それぞれの授業担当者は、教場に全ての荷物を持ってくるように注意を喚起したが、授業中の教場のすぐ側から貴重品が盗まれるとは、異常な事態である。教務課および教育担当副学長に相談したところ、来年度からはカギ付きのロッカーを更衣室に設置するということで対処することとなった。だが、引き続き、学生への注意喚起・貴重品管理の指導を行うとともに、安心・安全な教場づくりのために努力していかねばならないであろう。（岡本純也）

## （２）スポーツ方法

### 受講者の傾向と特徴

2008年度のスポーツ方法 全体（19コマ開講）の受講生は360名であった。近年、スポーツ方法 の受講生数は減少する傾向にあり（2003年度575人 2004年度621人 2005年度537人 2006年度450人 2007年度485人）大学の授業においても「スポーツばなれ」が進行していると考えられる。年度末に行った「スポーツ方法 に関するアンケート」の結果によると、回答者に占める女子の割合は12%と昨年（9.9%）同様に低く、特に女子学生にスポーツを敬遠する傾向が強いことが分かる。一方で、今年度は、「初めてスポーツ方法 を受講する者」の割合が54%となり、コアなりピーターの割合が増加する傾向（2007年度の2回以上の反復履修者は56.48%、うち4回以上の受講者が26.6%）が緩んだともみてとれる。

授業担当者のアンケートからは、登録はしているものの1回も出席しない者や数回出席した後に出てこなくなる者が増えていることを問題としてあげる意見が散見された。スポーツ方法

では、各学期はじめに履修のための抽選を行っているのであるから、登録できた者は抽選に落ちた者がいることを自覚して参加するようにしてほしいものである。今後、このような無責任な受講生を減らすための取り組みを検討する必要がある。

### 授業の内容と方法

スポーツ方法 の授業は、例年サークルなどからの参加者（経験者）が多く、高度なレベルの学習の場となる（上野・坂：バドミントン、尾崎：テニスなど）。このことは、スポーツ方法 の授業において欲求不満を感じていた経験者に達成感・充実感をもたらすことになる一方で、初心者が最初から臆して受講しなかったり、授業の中で疎外感を感じてしまうということになる傾向をももつ。他方、経験者が初心者を早く高いレベルまで引き上げようとし、初心者がそれに応えようとすることによって学習が促進されるという効果も期待される（坂：バドミント

ン、岡本：フライングディスクなど）。初心者と経験者、両者の要望を満たすようなプログラムの開発が必要であると考えられる。

(岡本純也)

以下は2008年度授業担当者の授業概要、コメントである。

### 上野卓郎

スポーツ方法 (バドミントン：火2夏) 登録人数：15名 履修人数：12名

スポーツ方法 (バドミントン：木3冬) 登録人数：32名 履修人数：23名

夏のクラスは15名(合格12名)、冬のクラスは32名(合格23名)。冬の不合格9名のうち4年生が8名、2年生1名。

履修者の意欲と取り組みは十分だった。夏の大幅な定員割れは、初めてで、火曜2限ということと関連したのだろうか。

### 尾崎正峰

スポーツ方法 (器械体操：木3夏) 登録人数：3 履修人数：3

毎年のことであるが、体育の授業でマット運動をしてきた程度で、高校までの器械体操経験者はいなかった。参加者は少なかったが、モチベーションは個々に高く、それぞれの技術水準に合わせて積極的に練習に取り組んだ。講義要綱に記し、また受講生の要望も高い「バク転」には全員がチャレンジした(教員の補助付)。

スポーツ方法 (テニス：木3冬) 登録人数：12 履修人数：9

初心者、初級者を主に想定している旨を講義要項、シラバスにも明示しているが、今回もテニスサークル所属、あるいは高校までのテニス部経験者の学生が受講した。その反面、まったくの「初心者」7名が履修し、そのうちの5名は最後まで続けて受講した。最後の授業が雨であったため、トレーニング室で総括的なディスカッションを行ったが、そこで出された評価は「楽しかった。卒業してからも機会があったらテニスをしてみたい」など好評であった。

昨年度同様に、毎回、練習内容とその自己分析を記すファイルを各人で作成するようにした(用紙は教員側で用意した)。

### 岡本純也

スポーツ方法 (フライングディスク：金2夏) 登録人数：11 履修人数：10

スポーツ方法 (フライングディスク：金2冬) 登録人数：18 履修人数：15

夏・冬ともに受講生の人数が少なかった。履修登録をせずに参加してくる者と合わせてやっとなゲームができるほどであった。もう少し人数が多くなることを望む。

### 坂なつこ

スポーツ方法 (バスケットボール：水1夏) 登録人数：20 履修人数：15

とにかく、ここ数年は就職活動での欠席者、遅刻者、早退者などが多く、恒常的にチームが組めなかった。全体的には良好な雰囲気。留学生が多いのも特徴か。

スポーツ方法 (バドミントン：水1冬) 登録人数：20 履修人数：16

今回は経験者が数名おり、2チームにわけて練習・ゲームとやったが、練習なども経験者が積極的に未経験者を指導するなどして、基礎的な技術が向上していたように思う。ただ、ミックスダブルスでおこなったが、出席者が少なく、多くの場合ゲームでは、コートは3面しか使わなかった。相変わらず「振り逃げ」が多いのは気になる。

### 青沼裕之

スポーツ方法 (テニス：月3夏) 登録人数：18 履修人数：18

スポーツ方法 (テニス：月3冬) 登録人数：15 履修人数：11

スポーツ方法 ・テニスの受講生は非常に熱心であるとともに、向学心旺盛であり、グループノートもきわめて真面目に丁寧に書いてくるので、言うことなし。従って、こちらの技術指導も相当程度浸透した実感が得られた。

### 鬼丸正明

スポーツ方法 (テニス：木3夏) 登録人数：28名 履修人数：23名

例年のことなのだが、初級者対象の授業といっているにも関わらず、初心者は3名、初級者は6名、残りの19名が上級者というアンバランスな構成に本年度もなってしまった。例年通り、学期の前半は初心者・初級者を重点的に講師が教え、その間上級者は自由練習、学期後半は初心・初級者と上級者のペアを作りダブルスのゲームを行う中で交流・学習するというパターンをとった。ただ昨年上級者の練習がうまくいかなかったことをふまえて、本年度は上級者を3つのグループにわけ、グループ主体で練習することを徹底した。そのせいか本年度は例年通り上級者グループも自主的に練習・運営できた。

### 柴崎涼一

スポーツ方法 (テニス：金1夏) 登録人数：19 履修人数：15

スポーツ方法 (テニス：金1冬) 登録人数：31 履修人数：16

普段よりも人数がかなり少なかったので個人的なアドバイスは例年よりもできたように思う。冬学期は、結果的に19人もドロップしてしまった。1限目なのである程度仕方がないのかもしれないが、私自身しっかり反省して対策をいろいろ考えたい。

スポーツ方法 (ゴルフ：金2夏) 登録人数：17 履修人数：14

スポーツ方法 (ゴルフ：金2冬) 登録人数：23 履修人数：15

初めてのゴルフ授業を担当したが熱心な学生が多く、ゴルフの楽しさをかなり伝えられたように思う。練習場での授業も好評だった。年明けにフォームをビデオに写して見せてあげようと思っていたが、2回とも雨が降ってしまい残念。来年はもっと早い時期にやろうと思う。

### Polster

スポーツ方法 (サッカー・フットサル：火2夏) 登録人数：19 履修人数：16

Surprisingly, in this year the Soccer Sports II class could be held with an appropriate number of students. We were always able to play half-field soccer in teams towards



Handball goals. A big number of Korean students took part. They were friends to each other, what might have been assured the proper attendance in this year. Some students asked for an additional Soccer Sports II class in winter semester, because they want enjoy playing soccer all over the year. The joy of playing the game seems to be a main reason attending this Soccer Sports II class. That is why also the regularity coming to the class drops from time to time. Four students haven't been credited, because of less attendance.

スポーツ方法（バスケットボール：火2冬） 登録人数：18 履修人数：15

One of the most endeavor classes, I have ever experienced in Basketball Sport II. Full 2-team-membership always was certain. Luckily, we have made the right team selection from the beginning. Every week the students had a tight Basketball game, which brought some of them almost to exhaustion. We have had also some pleasant communication in a mixed language environment: English – German – Japanese. Some students took that course for the second or third time.

**渡辺雅之**

スポーツ方法（ジョギング&フィットネス：木2夏）

スポーツ方法（卓球：木1冬）

### （3）スポーツ科学・健康科学

本年度開講の講義について、担当者からのアンケート回答を掲載する。

スポーツ文化（高津勝 木2：夏） 登録人数：144 履修人数：111

（1）講義を軸にグループ学習を数回、併用する授業展開。中間にレポートの提出と発表、期末に筆記試験を行った。

（2）「越境するスポーツ」をテキストにし、執筆者に1回ずつ出講してもらった。私としては、各講師の授業方法や講義内を興味深く拝見・拝聴することができ、参考になった。

（3）商学部の学生が多かった。スポーツへの社会問題からの切り込み、という点で、商学部の授業との違いがあったらしく、その点で新鮮さと違和感をもったようだった。

（4）受講者は単位をとりやすい授業、といった感じで履修した者が多かったようだ。

国際スポーツ運動（上野卓郎 木3：夏） 登録人数：10名（履修人数：6名）

ゼミ形式で、各自のテーマ発表と討論、最終レポートに向けた指導を行った。各自のテーマは次の通り。1．ドーピング問題、2．障害者スポーツとパラリンピック、3．野球の国際的地位、4．南アフリカ・ワールドカップ、5．女性スポーツ史、6．スポーツとギャンブル。受講生は、2年3人、4年3人だった。

スポーツと権利（内海和雄 火3：冬） 登録人数：399 履修人数：約358

2301教室に常時300名程度の出席であり、TAによる補助は大変に助かった。

講義では敢えてパワーポイントを使わず、教科書の指定もしていたから、プリント配布もあまり行わず、もっぱら伝統的な講義形式であった。それでも内容的にはかなり準備したから、授業については概ね好評であったと思う。

テーマは「アマチュアリズム論」であり、内容としては資本主義社会とアマチュアリズムとの関連であったが、スポーツの現象が資本主義社会と密接に関連するものであることが分かったという感想が多かった。

内容的に、社会科学的なものであったから、それになれている2年生以上の成績が良いように思われる。また4年生は就職や卒論の関連もあり、出席点でマイナスとなったり、不参加による「F」も多い。

スポーツと映像文化（鬼丸正明 木3：冬） 登録人数：354名 履修人数：345名

オリエンテーション参加者が教室の定数を越えたので本年度も抽選を行う。受講希望者は647名。抽選合格者を417名。これは昨年とほぼ同じ数。しかしそのうち登録した者は352名で、昨年のほぼ倍の学生が抽選で合格したのに登録しなかった。そして抽選に参加せず登録した者3名（これは原則「単位なし」）、履修撤回（と思われる）者1名。最終登録人数は354名となる。毎回の出席者は平均281名で教室定員より100名ほど少なく、今年は大分余裕のある授業だった。昨年度に加えて今年も総括を更に充実させたため、スポーツ映像の歴史的背景や現在の問題状況がよくわかった、授業の意図が理解できたという声が多かった。

ヒューマンセクソロジー（村瀬幸浩 火2：夏） 登録人数：338 履修人数：320

今までになくよく聞いてくれた印象がとても強く残っている。

運動と体力の科学（渡辺雅之 木2：冬） 登録人数：80

#### （4）教養ゼミ

教養ゼミ（岡本純也 水2：冬） 登録人数：8 履修人数：8

履修登録上8名だが、1名、語学の抽選科目にエントリーし、不幸にも水曜2限が割り振られてしまった者が、語学の授業をあきらめ、かつ教養ゼミの単位も取れないという状況のまま参加した（制度上、どうにかならないのか）。前半は須藤廣・遠藤英樹著『観光社会学』明石書店、2005年を輪読した。後半は、それぞれの最終レポートのテーマについて議論した。

最終レポートのテーマは以下の通り。これらのレポートは、レポート集にまとめられた。

「観光地としての日本 インバウンド」

「星野リゾートに見るプロデューサーの姿」

「景観保護について - フランスを参考に見る - 」

「屋久島の現状と課題 真の観光の成功に向けて 」

「メディア時代の観光旅行」

「地域住民・プロデューサーの接近・ツーリストの接近 さいたま市の観光事例から 」

「訪日アジア人観光客」

「『萌え米』の人気にみる現代のオーセンティシティ観」

「地域活性の手段としての着地型観光～香川県直島町～」

教養ゼミ（坂なつこ 金2：冬） 登録人数：1 履修人数：1

「スポーツとジェンダー」をテーマに設定したが、受講生は1名(法学部・2年)のみだった(ガイダンスには4名ほどきた)。その代わり、高津ゼミの4年生と坂ゼミの4年生(副ゼミ)が時々ボランティアで参加し、議論をすることができた。テキストは『スポーツ・ジェンダー学への招待』飯田,井谷(編著)明石書店 2004年。一章ずつ報告してもらい、最後に自分でテーマを選んで発表してもらい、それをレポートにして提出してもらった。テーマは『日本のドラフト制度について』。学生の制度についての興味をどのように社会科学的に発展させていくかが課題となった。

教養ゼミ（尾崎正峰 木2：夏） 登録人数：0 履修人数：0

オリエンテーションでは5名参加したが、最終的に履修者はいなかった。

## (5) 学部講義・ゼミ

**社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 坂 なつこ(金2・冬)** 登録人数:156 履修人数:121

時事的なトピックスを入れるように心がけながら、かつ社会科学の対象としての「スポーツ」とはどのような切り口があるのかを提示できるように試みた。中には最後まで客観化できないコメントも散見されたが(「スポーツ大好き」的な)、多くが社会科学的分析への糸口をつかんだように見えた。成績は、毎回のコメント+ブックレビュー(冬休み)+テスト。他方で、テストは総合的にはあまりよくできなかった。さらに、毎回の遅刻者には閉口した。記録を取ってみるとほとんどが常習者で、次回以降なんらかの対策をとらないといけないと思っている。

**社会学部講義・スポーツ問題の社会学 上野卓郎(火2・冬)**

**社会学部講義・スポーツと社会過程/身体社会史(今年度休講)**

**商学部講義・スポーツ・ビジネス論(今年度休講)**

### < 学部ゼミ >

**商学部ゼミ 岡本純也(木4・5)** 登録人数 3年7名、4年7名

夏学期は、原田宗彦編著『スポーツ産業論(第4版)』(2007年)を輪読し、アラカルト的に様々なテーマを扱うテキストをヒントとして、各自が自分の卒論のテーマを模索した。夏学期中に、千葉ロッテマリーンズのマリンスタージアム、夏休み中に富士スピードウェイへの現地調査を行ったが、そこからゼミ生の興味を引き出し、自主的なテーマ探求につなげることには失敗した。

冬学期には、佐伯年詩男著『現代企業スポーツ論』(2004年)を読み、今後の企業とスポーツの関係などについて議論をすると同時に、4年生の卒論の検討を行った。最終的に卒論を提出したのは6名で、2月15日にOBや外部の研究者、スポーツ・ビジネス従事者などを招いて卒論発表会を行った。卒論のテーマは以下の通り。

「着ぐるみの内側 - スポーツチームとマスコット - 」

「爆音の消える日 - F1 の未来 - 」

「人はなぜ賭けるのか」

「スポーツとイールドマネジメント」

「スポーツファンの心をつかむ方法 - CRM はスポーツにおいて有用か - 」

「ソ連という名を持つスケート大国 - ソビエト連邦時代におけるフィギュアスケートに対する国家支援 - 」

**社会学部ゼミ 高津勝（木4） 登録人数：4 履修人数：通年2 + 冬学期のみ2**

講義テーマ：スポーツと社会

卒論テーマ：「人見絹枝をめぐる言説分析」

「卓球の進むべき方向性」

「ヨーロッパ・サッカーにおける人種差別問題」

**社会学部ゼミ 尾崎正峰（木4） 登録人数：4 履修人数：4**

3年ゼミの履修者がいなかったため、4年ゼミのみの開講。

テキスト輪読（中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』、「スポーツイベントと開発」「現代スポーツとメディア」に関する英語文献）および卒論の検討を行った。

**社会学部ゼミ 坂なつこ（木5） 登録人数：5 履修人数：5（副ゼミ1名含む）**

講義テーマ：テキストの輪読（Sport a critical sociology, R. Giulianotti, Polity, 2005）

社会学部ゼミ 上野卓郎 受講生なし

社会学部ゼミ 内海和雄 受講生なし

## （6）大学院講義・ゼミ

**大学院講義 岡本純也（木2・夏）**

**大学院ゼミ 岡本純也（木3）**

社会学研究科博士課程2名、商学研究科研究生（留学生）1名

夏学期には、大学院講義「スポーツ・マネジメント」と連続して行った。

テーマは「スポーツ・ツーリズム」。まず、Brent W. Ritchie and Daryl Adair (eds), Sport Tourism -Interrelationship, Impacts and Issues-, Channel View Publication, 2004 を読みながら、スポーツ・ツーリズムの定義や研究手法などについて議論を行った。

冬学期には、ジョン・アーリ『場所を消費する』（2003年）などを読みつつ、観光を分析するための方法、現代社会における観光産業や観光文化の意味について検討した。

**大学院講義 尾崎正峰（水2・夏） 登録人数：1 履修人数：1**

テーマ：スポーツにおけるローカル化とグローバル化

**大学院講義 内海和雄（火3・夏）** 登録人数：4 履修人数：4

講義テーマ：スポーツ研究論

スポーツの研究方法論について、私の研究を素材にしながら、具体的に展開した。その講義ノートは2009年2月に同名で上梓された。

**大学院ゼミ 高津 勝（木3）** 登録人数：2 履修人数：2+（1）

講義テーマ：スポーツと社会

各自の研究発表と討論、および論文（修士論文と課程博士論文）指導を行った。

**大学院ゼミ 内海和雄（火2）** 登録人数：2 履修人数：4

講義テーマ：研究論

個々人の研究課題、方法論を具体的に提起し、参加者で討議した。また、何人かの外国人教授招聘に伴い、彼等の論文を事前に検討した。こうして、学習も兼ねた。外部から2人がゼミに参加し、研究論はかなり深められたと思う。

**大学院ゼミ 尾崎正峰（水1）** 登録人数：2 履修人数：2

それぞれの研究テーマに基づく個別発表と討論を行った。

**大学院ゼミ 坂なつこ（月5）** 登録人数：1 履修人数：1

**大学院ゼミ 上野卓郎（木4）**

### 3. 教育条件の整備・拡充

昨年度開設された「教育担当副学長と運動文化科との情報連絡会」を本年度1回（7月8日）行ったが、10月以降の担当副学長の辞任などもあり、新執行部交代期の第2回開催はできなかった。また、1月から3月にかけて、スポーツ施設予定の東地区への研究館予定地策定をめぐる施設マネジメント委員会委員長・財務担当副学長とのエリア主任の数度の会談が行われた。まず、情報連絡会の概要を総括し、次に、本年度の施設・設備整備の進捗状況について整理し、教員アンケートから教育条件に関わる意見を取り上げる。最後に、財務担当副学長との会談の結果とスポーツ施設整備の展望について報告し、今後の課題を従来の方針の修正の必要性と合わせて列挙する。

#### （1）教育担当副学長との情報連絡会

内容は、平成21年度概算要求事項について、当面の運動施設の整備について、その他、であった。について、体育館増改築の概算要求順位が下がったことを正したところ、坂内副学長から、順位が付いている訳ではない、耐震化最優先であること、財務で任せてほしいと言われている、という説明があり、この件では教育担当としては限界があり、今後の窓口として、法人化後の担当として設けられた施設マネジメントの財務担当副学長（山内）も考えるよう示唆された。について、（1）フットサルコート整備と金網フェンス設置の大学戦略推進

経費(2007年度)からの請求を2008年度提出しなかったが、引き続き要求することについて、坂内副学長から、当該経費は事前ヒアリングがあったが、今年的方式では要求が戦略に合致するか財務が評価するという今までになかったことが導入されたと説明があった。(2)オムニコートの改修について、後援会予算650万を要求するとの回答があった。この予算では全面張替えは無理だが、改修・補修方法、時期を含め協議することとなった。では、(1)授業と課外活動の円滑な実施のための私たちの提言、(2)実技場所の改修等(校費、寄付、いずれでも)について運動文化科との協議事項にすること、(3)課外活動施設整備計画の情報について、意見交換、確認を行った。さらに、盗難、キャンパス安全問題、障害学生への対応についても話し合った。

この情報連絡会の内容は多岐に渡り、説明、情報、意見交換も豊富であったが、オムニコート改修以外は大型施設要求の実現のめどは得られなかった。

## (2) 体育関係施設・設備の整備

本年度の施設・設備整備の状況は以下の通りである。昨年度に比べて成果の数は少なかったが、オムニコート補修は特記すべき成果である。

テニス・オムニコート補修(2009年2月着工、年度未完成、学生支援課、施設課)

フェンス沿いを除く補修、1500万の予算がついた。1月13日測量開始。

体育館内用ハンドボールゴールの更新(2008年11月)

折りたたみ式に、器具庫内に滑車付き収納台(教材費)特注。

バスケットボードワイヤー修理(2008年12月)

テニスコート・パレーコート転圧ローラー更新(2008年12月、学生支援課)

エンジン刈払機(草刈用)更新(2008年6月)

なお、2007年6月から2年越しで要求しているテニスコート周辺通路の水はけ改善は実現していない。

教員アンケートでは、昨年度同様、作業員の坂口さんへの感謝の言葉が多く寄せられた。坂口さんのような方にコートでの実技の条件が支えられていることに思いをいたしたい。良くなった点では、バドミントンのボールの出し入れが格段に楽になったと、器具庫の改善の効果が挙げられている。一方、問題点や改善を要する意見も次のように多かった。「フィールドの水はけは非常に良いが、ゴール前の地面の凸凹がひどい」、「ソフトボールの器具庫が野球場近くになり、多少便利になった。しかし、倉庫周りが時々ゴミの置き場になるケースがあり、...」、「テニスコートの審判台で痛んでいるものがある。ベンチにも古く痛んでいるものがある」、「パレーボールの数が減ってきているので、新年度には補充を」、「バドミントンについてはグリップの傷んでいるものが増えてきている。シャトルコックについては、水鳥の羽のものの管理が不行き届きと考えられる点が目立つ」、「雨天時の教室でビデオ、DVDが見やすい教室を確保したい」、「テレビの画面が小さすぎる。特に最後尾の列に座る学生からは殆ど見えない状況である」、「根本的な問題だが、室外種目の授業の場合、雨天時に実技ができるスペースはぜひとも必要なので早急に確保していただきたい」。

### (3) 財務担当副学長との会談と施設充実の展望

昨年末、東地区スポーツ施設予定地に研究館を建設するという案が施設マネジメント委員会のWG(財務担当副学長と各部署長で構成)で決定されたとの情報を得て、エリア主任の上野が直ちに、当該地区の用途についての評議会議事録(2000年5月)を示し、財務担当副学長との会談を1月7日、29日、電話での情報開示を2月3日に、最後に3月2日にもった。2月3日までの経緯は1月、2月のエリア会議で逐一報告してきた。3月2日の最後の会談で示された最終的な決定は以下のようなものであった。施設マネジメント委員会は、東地区に研究館を建設する方針を3月4日の評議会に提案する。そのさい、評議会でしかるべき手続きをふんで議事録に改めて当該地区の残余の用地に予算がつけばスポーツ施設を整備することを明記する。

これに関わって、山内副学長から、フットサルコート要求は絶対的なものか、あるいは体育館増改築ができればそれでいいのかという問いがあり、このことについて2月のエリア会議でも想定して方針を確認した通り、次のように答えた。体育館増改築ができればフットサルコートもそれに吸収されるから、その意味では絶対的でない。したがって、増改築がいよいよ絶対的だということだ、と。副学長が増改築をなんとしても早急に実現しなければならないというところまでもっていくにはもう一段のプッシュが必要だと感じたので、昨年の教育担当副学長との情報連絡会のことを引き合いに出して、新年度の夏までの財務担当と教育担当の二人の副学長との情報連絡会の開催を要望したところ、即座の同意が得られ、まず盛副学長にその開催を依頼し、それに山内副学長も同席するという形で行うということを確認した。

### (4) 今後の課題

財務担当副学長との会談結果からも明らかなように、我々の施設要求の方針と担当副学長との窓口の再構築をはかる必要がある。

#### 1. 運動文化科にかかる施設整備計画の再構築

体育館増改築の早急な実現を執行部の意志とさせ、予算確保の具体化を迫る。

フットサルコート予定地の残った土地の整備、金網フェンス設置の要求等、代替案を考える。

テニスのクレートコート的人工芝化要求の具体化を図る。

西キャンパス陸上フィールド内芝地の整備と整備要員確保の要求の継続。

国立地区でのプール・体育館建設の要求との関わりで、小平地区の「如水スポーツプラザ」の国立地区移築構想(非公式の打診では不可能だが)の展望。

#### 2. 教育担当・財務担当副学長との情報連絡会の開催

施設マネジメント委員会委員長の財務担当副学長との窓口を確立する契機ができたので、今後公式の窓口として確立する上で、教育担当副学長との情報連絡会への財務担当副学長の同席を得ることは重要である。ここでの両副学長との意見交換によって執行部の意思形成に強い力を作用させることが目標である。もちろん、学内各部署(とくに教務課、学生支援課、施設課)との情報の交流・共有化を進め、協力して施設・設備の整備拡充に取り組むという情報連絡会の趣旨は堅持する。(上野卓郎)

## ・教育部活動

### 1．実践交流会

今年度は、2回の実践交流会を行った。司会は坂、記録は岡本が担当した。

第1回、6月17日、内海報告「私の授業実践-ソフトボール(スポーツ方法)」。報告内容は、1.教材解釈、2.年間計画、3.グループ分け、4.毎時の概要、5.施設・用具、6.歓送と授業評価。詳細は巻末資料として掲載。

第2回は、「実践報告・スポーツ方法 サッカーの授業」(2008年10月21日)というテーマで高津が報告した。報告のために当日提出した資料は、シラバス(スポーツ方法(サッカー)2008年)、授業計画(2007年度)、グループノート・期末レポートの記載例(1件)、授業と学習に関するアンケート結果(授業評価、2007年度)、授業に関するアンケート(2007年度)、サッカー方法(受講者経験調査、2008.4調査)、スポーツ方法(サッカー、1限)を受講しているみなさんへ(2008年度)、冬学期サッカー(火1)予定(2008.10.17)の計8点。以上の資料をもとに報告し、あわせて、夏学期の最終授業で撮影したゲームのビデオを再生しながら、触球数調査やゲーム展開の特徴について説明、そのあと質疑・討論を行った。詳細は、巻末の資料を参照されたい。(高津 勝)

### 2．教育活動日誌

- 2008/04/03 教育部会 (新年度顔合わせ会打ち合わせ) \*新年度顔合わせ会  
04/15 教育部会 (身障者受入の件、スポーツ方法 の受付)  
04/30 教育部会 (身障者受入の件、全学共通教育プロジェクト会議、留学生の受講について、学生委員会報告)  
06/17 実践交流会(ソフトボールの授業:内海和雄)  
06/24 教育部会 (講義科目の再編について、副学長との情報連絡会開催要求、身障者受入の件、KODAIRA 祭延期について)  
07/08 副学長との情報連絡会(平成20年度第1回)  
09/25 教育部会 (来年度カリキュラム、講義科目の再編、身障者受入-療育コース復活)  
10/14 教育部会 (来年度カリキュラム)  
10/21 実践交流会(サッカーの授業:高津勝)  
10/28 教育部会 (来年度カリキュラム)  
11/24 教育部会 (来年度カリキュラム確定)  
12/09 運動施設利用調整会議  
2009/01/27 教育部会 (教育活動目次及び分担、「スポーツ方法アンケート」について、教員へのアンケート、『共通教育への誘い 豊かな学修のために』改訂版について、更衣室盗難事件について、労災申請、予算関連)  
03/04 教育活動の総括と方針会議



### 3. 調査活動

今年度もスポーツ方法の受講者に対して、運動文化科として独自のアンケートを実施した。質問項目はここ数年同様のものとなっている（巻末資料参照）。

ここでの結果は、運動文化科全体として当該年度の教育活動に関する総括討論を行う上でのひとつの重要な素材となっているという側面と同時に、授業を担当する個々の教員が自らの授業を振り返る上でも大きな意味を持っているといえる。（尾崎正峰）

#### 1. スポーツ方法に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法の受講生（登録者数：1,056人）
- ・実施期間：2009年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：895

##### (1) 調査結果の概要

###### 受講理由

- \* 「種目が好き（やってみたい）」53.3%
- \* 「時間割上とりやすかった」29.2%
- \* 「健康・体力の維持・向上」24.0%
- \* 「上手になりたい」19.7%
- \* 「仲間をつくる」11.0%
- \* 「その他」では、「抽選に落ちたから」が最も多く、その次は「必修だから」

###### 目標達成度

- ・肯定的、および中間的評価

	大変そう思う	そう思う	どちらとも（単位：％）
「健康・体力の維持・向上」	13.9	51.1	24.9
「技術、練習方法の認識の深まり」	18.3	59.4	16.6
「技術・技能の向上」	14.9	49.7	27.3
「スポーツを楽しめるようになる」	32.7	52.8	11.1
「親しい仲間ができた」	31.4	53.6	12.3

- ・否定的評価

	そう思わない	まったくそう思わない（単位：％）
「健康・体力の維持・向上」	7.3	2.8
「技術、練習方法の認識の深まり」	3.8	1.9
「技術・技能の向上」	5.6	2.6
「スポーツを楽しめるようになる」	2.2	1.2
「親しい仲間ができた」	1.8	1.9

###### 満足度

たいへん満足 (35.9) まあ満足 (47.3) ふつう (13.1)

#### 方法 の履修について

##### \* 履修の意向

- 「ぜひ履修したい」 8.1%
- 「時間帯が合えば」 22.2% 「やりたい種目があれば」 19.3%
- 「履修するつもりはない」 33.7%
- 「わからない」 16.6%

##### \* 履修非希望の理由

- 「単位数が少ない」 55.3% 「他の科目を優先する」 53.2%
- 「スポーツが好きでない」 11.9% 「スポーツの必要を感じない」 9.9%
- 「クラブ等で十分」 20.1%
- 「やりたい種目がない」 5.1%

#### (2) スポーツ方法 への意見・希望

- ・施設改善 (雨天時の実技の代替措置、保安も含めて)
- ・開講時限の拡大 (4限以降の開講、等)

### 2. スポーツ方法 に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生 (登録者数：360人)
- ・実施期間：夏学期 = 2008年7月、冬学期 = 2009年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：216 (夏学期：120、冬学期：96)

#### (1) 調査結果の概要

##### 受講生の学年

1年 0.9%      2年 32.9%      3年 27.8%      4年 37.0%

##### 性別

男 88.0%      女 12.0%

##### 受講経験

なし 54.2%      あり 45.8%

	全体	なし	あり
1年生	2 100.0	2 100.0	0 0.0
2年生	71 100.0	51 71.8	20 28.2
3年生	60 100.0	25 41.7	35 58.3
4年生	80 100.0	36 45.0	44 55.0

## 受講理由

- \* 「健康・体力の維持・向上」 64.0%
- \* 「上手になりたい」 48.1%
- \* 「種目が好き（やってみたい）」 43.9%
- \* 「仲間をつくる」 14.0%
- \* 「時間割上とりやすかった」 8.9%

## 目標達成度

・肯定的、および中間的評価

	大変そう思う	そう思う	どちらとも（単位：％）
「健康・体力の維持・向上」	34.5	51.9	10.7
「技術、練習方法の認識の深まり」	40.3	49.5	8.3
「技術・技能の向上」	32.0	54.4	9.7
「スポーツを楽しめるようになる」	50.5	46.1	2.4
「親しい仲間ができた」	29.6	42.2	19.4

・否定的評価

	そう思わない	まったくそう思わない（単位：％）
「健康・体力の維持・向上」	1.9	1.0
「技術、練習方法の認識の深まり」	1.5	0.5
「技術・技能の向上」	3.4	0.5
「スポーツを楽しめるようになる」	0.5	0.5
「親しい仲間ができた」	6.3	2.4

## 満足度

たいへん満足（55.8） まあ満足（37.9） ふつう（4.9）

## 4．教育部の活動・体制

本年度の体制は、坂（部長）、岡本、高津、渡辺（庶務）であった。なお、室長（上野）も、教育部会に出席した。

教育部の活動については、活動日誌参照。

## ・2009年度教育活動の方針

### 1．2008年度の達成と課題

達成されたことの第一は、後任人事で2名が採用されたことがあげられる。第二には、定年前（上野）のサバティカルに関して、非常勤講師を確保することができた。

第三に、運動文化のカリキュラムの体系化に向けて検討を始め、科目の整理に着手したこと。これについては、今後専任スタッフが充足した後に、抜本的な検討を始めることとなった。

施設面では、オムニコートの改修には予算がついたが、体育館の増改築については、未達成に終わった。

今後の課題としては、人事がある。未定の人事（1名）について見通しを持つことと、今年度退職者の後任人事に着手すること。

第二には、共通教育改革が全学ワーキンググループの報告をもって終了したため、今後の共通教育改革については、動向を注視し、かつ主体的に関わっていくことが求められる。

施設面では、体育館の増改築については、引き続き概算要求の実現を求めていくために、学生担当副学長との情報連絡会を開催し、昨年提案があったように、財務担当副学長との接触を図ることが重要である。

恒例となっている運動施設利用調整会議については、当該クラブ・サークルの参加が減少していることから、そのあり方については検討される必要があるだろう。

### 2．2009年度の基本方針

未定の早川後任人事について、引き続き努力する

上野後任人事を2009年4月からすすめる。

カリキュラム改革、講義科目の改廃 - 新任の教員の分も含めて検討する。

スポーツ方法 のゼメスター化履修の可能性について検討する。

長期欠席者・見学者についての対応策について検討する。

体育館の増改築等について、学生担当副学長および財務担当副学長との連絡を密にし、引き続き概算要求の実現のために働きかける。関係各部署からも情報収集に努める。

多目的コート（旧称：フットサルコート）整備要求と、（その達成の後）当該地の使用方法について検討する。

### 3．教育活動

#### （1）2009年度のカリキュラム編成と体制

<開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講コマ数は、通年コマに換算して43コマ。

	2009 年度		2008 年度	
全学共通教育開講コマ	43	通年コマ	42	通年コマ
・方法	29	通年コマ	28	通年コマ
・方法	19	半年コマ	19	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

< 体制 >

- ・ 専任は、高津・内海退職、坂上・中澤着任のため、2008 年度に続き、6 人の体制となる。
- ・ 上野の一部サバティカル実施 + 定年前負担軽減は、非常勤講師を充てる。
- ・ 専任担当総コマ数は 19 コマとなる。(3.5 コマ / 5 人、1.5 コマ / 1 人)
- ・ 専任不補充およびサバティカル等を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は 24 (昨年度より 1 減) となった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は 55.8% である (2008 年度 59.5%)。
- ・ 2008 年度の非常勤講師の継続を基本に、渡辺講師のスポーツ方法 (半期 × 2) を削減。

< 種目別 2009 年度開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2009 年度	2008 年度	2009 年度	2008 年度
テニス	6	7	6	6
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	2	3
サッカー	5	4	2	1
バレーボール	3	2	-	-
ソフトボール	2	3	-	-
ジャズダンス	2	2	-	-
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	2
卓球	-	-	0	1
剣道	-	-	1	-
ジョギング&フィットネス	-	-	1	1
療育コース	1	-	-	-
	<b>29</b>	<b>28</b>	<b>19</b>	<b>19</b>

< 2009 年度の特徴 >

- ・ スポーツ方法 では、サッカーが 4 から 5、バレーボールが 2 から 3 に増、テニスが 7 から 6、ソフトボールが 3 から 2 に減となった。
- ・ 療育コースを復活した。(継続については未定)

- ・ スポーツ方法 では、サッカー・フットサルが 1 から 2 に増、バドミントンが 3 から 2、卓球は 1 から 0 に減、剣道を新設した。
- ・ 種目定員を、スポーツ方法 のバスケットボールを 32 から 36、フライングディスクを 40 から 44 に変更した。
- ・ 新任専任教員の種目担当により、継続講師のスポーツ方法 の種目変更（青沼サッカーをテニス、森テニスをバレーボール）を依頼した。
- ・ 昨年度同様、スポーツ科学・健康科学は 6 コマ、教養ゼミは 3 コマとなる。
- ・ 前年度に引き続き、月曜日が非常勤講師のみの授業日になる。

#### ( 2 ) カリキュラム、および教育内容・方法の充実

新任 2 名の着任により、新たな体制で臨むことになるが、方針に基づきその基礎作り  
に着手する。

### 4 . 教育条件の整備・拡充 ( 2008 年度の成果と課題 3. ( 4 ) 今後の課題 再録 )

#### ( 1 ) 運動文化科にかかる施設整備計画の再構築

体育館増改築の早急な実現を執行部の意志とさせ、予算確保の具体化を迫る。

フットサルコート予定地の残った土地の整備、金網フェンス設置の要求等、代替案を考  
える。

テニスのクレートコート的人工芝化要求の具体化を図る。

西キャンパス陸上フィールド内芝地の整備と整備要員確保の要求の継続。

国立地区でのプール・体育館建設の要求との関わりで、小平地区の「如水スポーツプラザ」  
の国立地区移築構想（非公式の打診では不可能だが）の展望。

#### ( 2 ) 教育担当・財務担当副学長との情報連絡会の開催

施設マネジメント委員会委員長の財務担当副学長との窓口を確立する契機ができたので、今  
後公式の窓口として確立する上で、教育担当副学長との情報連絡会への財務担当副学長の同席  
を得ることは重要である。ここでの両副学長との意見交換によって執行部の意思形成に強い力  
を作用させることが目標である。もちろん、学内各部署（とくに教務課、学生支援課、施設課）  
との情報の交流・共有化を進め、協力して施設・設備の整備拡充に取り組むという情報連絡会  
の趣旨は堅持する。

### 5 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

出席するクラブ・サークルが減少していることから、学生支援課とも連絡を密にし、  
より充実を図る。

### 6 . カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

例年の調査活動に加えて、それぞれの授業担当者の「学習のためのアンケート」の結果を検  
討し、運動文化科全体のカリキュラムおよび教育法改善のための資料とする。

## 7. 教育部の活動

### (1) 行事の開催

教育部会の定期的開催  
実践交流会の開催（新任の実践交流につとめる）  
施設整備関係部署との交流  
新年度顔合わせ会  
教育活動の年度末総括

### (2) 調査活動

「スポーツ方法」の満足度と「スポーツ方法」の受講希望調査（冬学期末）  
「スポーツ方法」の満足度調査（夏・冬学期末）

### (3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

「われわれの教育活動」の刊行  
施設整備・改善のための基礎資料の作成

### (4) 2009年度 教育部関係日程（案）

4月	日（ ）	新年度顔合わせ会（入学式）
月	日（ ）	実践交流会1
月	日（ ）	実践交流会2
月	日（ ）	教育活動の総括・方針検討会議
月	日（ ）	年度末懇親会

## われわれの教育活動

2008年度総括と2009年度方針

30

2009年4月2日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教員室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中2-1